



Title	近畿地方における埴輪工人の移動とその背景
Author(s)	木村, 理
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 367-377
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105054
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近畿地方における埴輪工人の移動とその背景

木 村 理

はじめに

古墳の展開とともに列島の幅広い地域で採用された埴輪は、地域性と広域性を兼ね備える器物であり、その両側面の検討を通じて地域間関係の復元に大きく寄与してきた。中でも広域的な共通性の背景には、地域を越えた工人の往来があったことは想像に難しくなく、その追究は埴輪の技術波及や地域間関係の具体を明らかにするための重要な視角とされてきた。一方で、実際には地域を越えて移動する工人の姿を捉えることは容易でなく、工人移動の実態や地域間関係を復元するための前提が十分に整えられているとはいえない。

そこで、本稿では埴輪生産が最も盛行する古墳時代中期の近畿地方を対象に、実態が不明瞭であった埴輪工人の地域を越えた移動現象についていくつかの実例を示し、王権中枢部を起点とした埴輪生産や技術波及、地域間関係の具体像の復元を試みたい。

1. 地域を越えた同工品の事例

(1) 百舌鳥・陵南赤山古墳と古市・土師の里南埴輪窯

近畿地方において、地域や古墳群を越えて同一工人・同一集団による埴輪が認められるケースとして、前期後葉の五色塚古墳周辺（廣瀬 2006）や和泉地域（三木ほか 2015）、巨棕池周辺（宇野 2018）の事例、後期における菅原東埴輪窯産製品の事例（鐘方・中島 1992、和田 2022）などが知られるが、その多くは製品の移動と推測されており、工人の往来については不明な点も多い。中でも、地域や古墳群内で拠点的生産が完結的に展開する中期においては、地域を越えて同一工人・同一集団による製品がみられる事例はことさらに少ない。

その点で、百舌鳥古墳群・陵南赤山古墳（円・20 m）と東大阪市・段上 2 号墳（方・10 ～ 15 m）の間に同工品を発見した内藤元太の研究は画期的であった（内藤 2018）。具体的には、埴輪編年のⅣ期 2 段階（木村 2022）に位置づけられる両古墳において、左利きでほかの特徴からも同工品と認定できる個体を見出したのである。

これを受けて、筆者も両古墳の生産組織分析を実施し、陵南赤山古墳と段上 2 号墳の間を往来した工人のそれぞれでの役割について検討した（木村・廣瀬 2024）。その結果、移動工人の

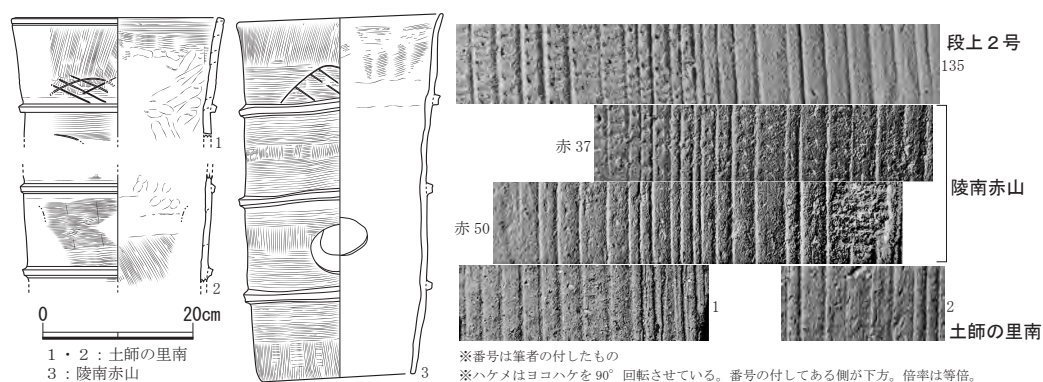


図1 陵南赤山古墳と段上2号墳、土師の里南埴輪窯の同工品

うち左利きで櫛歯状ヘラ記号を付す工人は、①陵南赤山古墳において製作本数、製作器種のうえで卓越した中心的工人であること、②段上2号墳でも同様の役割を帯び、製作本数の少ないサブ的な工人をグループ内に抱える、指導的な役割も有していたことを明らかにした。また、③同工品が古市古墳群の土師の里南埴輪窯でも存在することを新たに指摘し、当工人が王権中枢古墳群の間を往来し、技術波及や中心的役割を担う者であった可能性を推断した（図1）。

このように、陵南赤山古墳で中心的な役割を担っている点、古市古墳群との間も往来している点などから、この移動工人については王権中枢古墳群側で主として活動する者として捉えられる公算が高く、したがって段上2号墳との間の移動は「指導型」（菱田1992）として理解できることを述べた。当事例は移動工人単体だけでなく、移動元・先での生産組織への組み込まれ方や役割もある程度復元しうる点や、王権中枢古墳群間を含む複数地点での移動が確認できる点で、工人の移動パターンをめぐる研究において重要であろう。

これを踏まえて、以下では生産組織の全体像はやや不明瞭ながらも工人の移動実態を捉えることができたいくつかの事例について検討してみたい。

（2）百舌鳥・定の山古墳と大和・石光山古墳群

検討するのは、百舌鳥古墳群の定の山古墳と石光山古墳群の埴輪である。定の山古墳は百舌鳥古墳群に所在する墳丘長70m程度の帆立貝形古墳で、出土埴輪は底部高9～10cm程度、外面B種ヨコハケの施行率が75%程度、Bd種ヨコハケが一定数を占めることからIV期3段階に位置づけられる。また、当古墳の埴輪は土師ニサンザイ古墳の資料と酷似しており、土師ニサンザイ古墳を中心とした拠点的生産に組み込まれていたものとみてよい。

墳丘各所から出土した資料の中に、外面に斜格子文を有する特徴的な個体が2点含まれている（柴田編2019）。報告番号16－56は、タテハケののち外面にヨコハケを施す個体で、右利き工人によるものとみられるが、内面にはわずかに右傾するタテハケが施される。16－59は

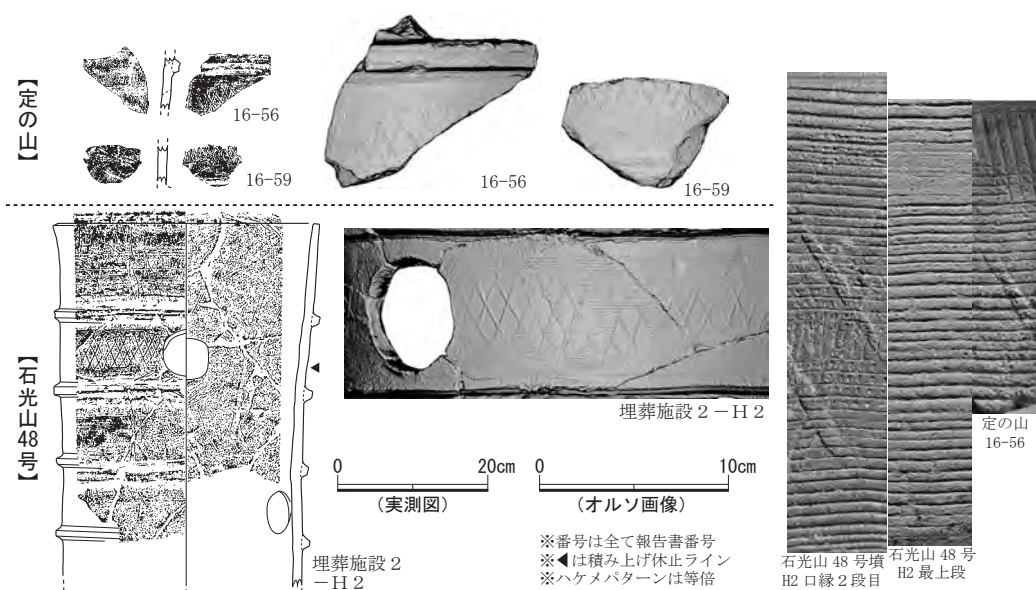


図2 定の山古墳と石光山48号墳の同工品

内外面ともにタテハケを施し、内面のタテハケはやはり右傾する。両個体に付される斜格子文は、文様部が凸部になっていることから工具に斜格子文が彫り込まれていたと想定され、外面調整ののちに施されたものと判断できる。

同様の特徴をもつ個体は、定の山古墳をはじめ百舌鳥古墳群では他に類例がなく、また同工品やハケメパターンの一致する個体も存在しない。特定工人による限定的な製作によるものと推測される。

このような定の山古墳の資料だが、酷似するものが奈良県・石光山48号墳から出土している。直径15mを測る当古墳では、墳頂部で2本の円筒埴輪を用いた埴輪棺が検出されており、そのうちの1個体に斜格子工具による文様が付される。個体は、突帯間隔9～10cm、外面にBd種ヨコハケを施すことから定の山古墳と同じくIV期3段階に位置づけられる。内面にはタテハケを施し、Bd種ヨコハケの静止痕の傾き方などから右利き工人とみられるにもかかわらず、やや右傾する。斜格子文は口縁部から2段目のほぼ全周にわたって施されていたようであり、縦横とも5cm程度を測る工具を水平方向に重複させながらあてがう。斜格子文が配される段は「積み上げ休止ライン」（藤井2003）にあたる。

特筆されるのは、当個体が定の山古墳16-56と同じハケメパターンを有する点である。加えて、双方は調整の省力が進む時期にあつて内面にタテハケを施す点、右利き工人にもかかわらず内面タテハケが右傾する点、などの特徴的な要素も共通する（図2）。資料の遺存状態により厳密な同工品分析は実施しえなかったが、いずれにしても類例がごく限られる斜格子文やハケメパターンの共通性に鑑みて、両者がほぼ同様の工人によって製作されたことは疑いない。

また、双方はよく似た胎土を呈するが、定の山古墳例は小径の長石を多く含む点でやや異なっており、工人が移動したうえでそれぞれの地域で製作されたものと判断しうる。

なお、石光山 48 号墳で用いられた埴輪棺は 6 条 7 段程度の大型品に復元され、群中でほかにも散見する同径の埴輪棺との間に同工品やハケメパターンの一致する個体は存在しない。石光山古墳群での埴輪棺の需要をまかなう小規模な生産というよりも、近隣の大型前方後円墳などで実施されていた、より大規模な埴輪生産との関係性を考慮しておく必要がある。その意味で、上記事例は百舌鳥古墳群、葛城地域のそれぞれに存在した拠点的な生産地間での工人移動のケースとして理解できるだろう。

(3) 古市・林 1 号墳と摂津・津門稻荷町遺跡

地域を越えた工人移動の実例として、続いては古市古墳群の林 1 号墳と摂津の津門稻荷町遺跡の例について検討する。林 1 号墳は古市古墳群中に位置する直径 15 m の円墳で、現状 13 基からなる林古墳群を構成する 1 基である。出土埴輪は、突帯間隔設定を行い B 種ヨコハケを施す個体と、底部調整を行う個体が併存しており、V 群埴輪出現期である V 期 1 段階に位置づけられる。各個体とも突帯に断続ナゲ技法の痕跡は認められないほか、底部調整を行いながらも外面 B 種ヨコハケを施す個体も存在する。

底部の遺存する小型品を中心に検討すると、出土埴輪は少なくとも 6 人程度の工人によって製作され、外面調整や底部調整の相違に対応する形でハケメパターンも異なるなど、互いに一定程度の独立性をもって生産に従事していた可能性が推測される（図 3）。また、同じ林古墳群内の林 10 号墳や同 13 号墳出土埴輪との間に同工品やハケメパターンの一致する個体は存在

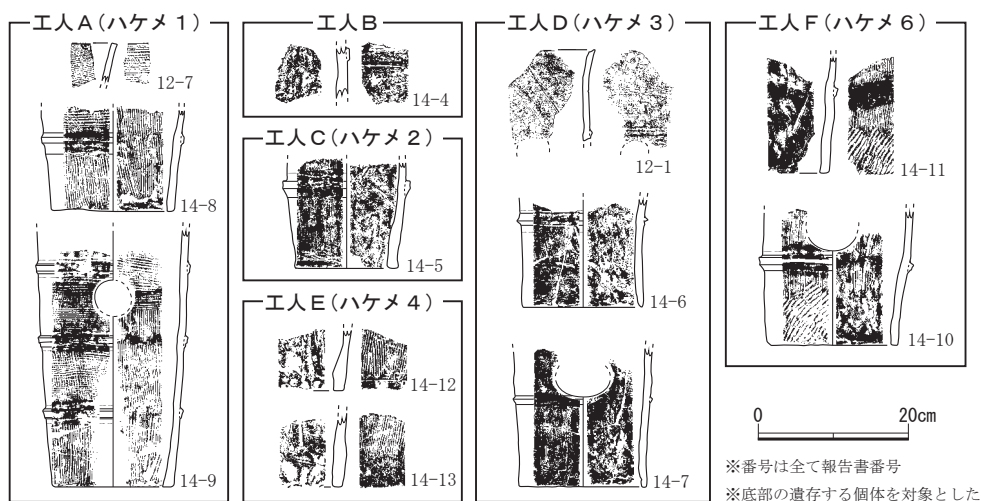


図 3 林 1 号墳出土埴輪の分類

しない。とりわけ、林1号墳と10号墳は互いに40 m程度の近接した位置に築かれるにもかかわらず、ヘラ記号も含めて共通性が見出せない。互いに有機的に築かれたと推定される小規模な古墳群の中でも、動員された集団はそれぞれ個別的であったと想定できよう。

さて、林1号墳では特徴的な個体として、底部調整に平行タタキを施すものが存在する。当個体は内外面ともにタテハケ調整を行い、底部高は11.0～11.5cmを測るなど底部調整工具を除けば通有の円筒埴輪である。底部調整は同一箇所には2～3回にわたって施される。そのほか、高さ4 cm前後の粘土帯を基部とし、成形時に内面へヨコハケを施すことも特徴的である。なお、同工品とみられる2個体を除き、出土資料の中で同工品やハケメパターンの一致する個体は存在しないなど数量的にも限定されるほか、形象埴輪などの製作に携わっていた形跡もない。当製作者は、林1号墳の埴輪生産に際して中心的な役割をもつ者というよりも、ごく一般的な円筒埴輪工人として編成されていたと考えられる。

他方、同様の特徴をもつ資料が西摂地域の津門稲荷町遺跡でみつまっている⁽¹⁾。当遺跡で出土した埴輪は、外面にB種ヨコハケを施すA類と、外面タテハケのみで突帯が著しく低平なB類に分類され（廣瀬2018）、前者は一部に底部調整を施すものが含まれることからV期1段階に、後者はV期2段階に位置づけられる。また、前者は近隣にかつて存在していたとされる津門稲荷山古墳（方円・49 m）所用の埴輪であった可能性がある。以下では、比較的資料に恵まれている前者を対象として検討を行う。

出土埴輪は、さらに1類：外面ヨコハケで底部調整も行わない典型的なIV群埴輪、2類：外面ヨコハケながらも底部調整を行う一群、3類：外面タテハケで底部調整も行う一群の3者に大別できる（図4）。各類型には2～3人程度の工人からなる工人グループがいくつか包摂されていたものと思われ、例えば3類中、平行タタキによる底部調整を特徴とするグループに属する19と21はともに基部内面にヨコハケを施すなど製作技法を共通させる一方、突帯形状やスカシ孔の位置、底部調整時の作業姿勢、ハケメパターンを異にする。このように、グループ内では2～3人程度の工人が内包されていたとみられるが、グループ間あるいは類型間では上

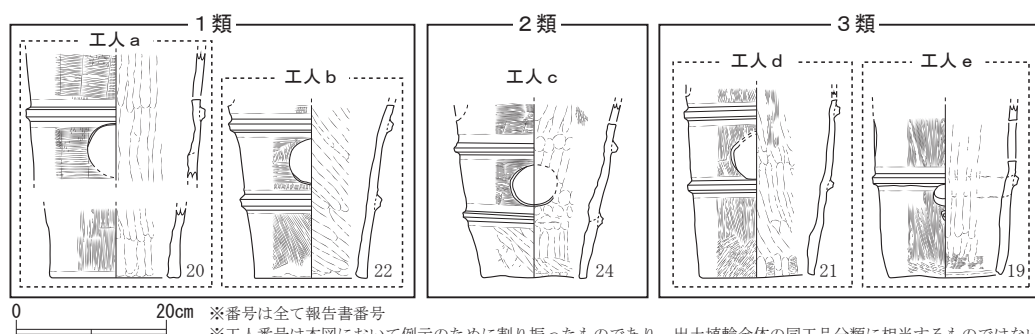


図4 津門稲荷町遺跡出土埴輪の分類

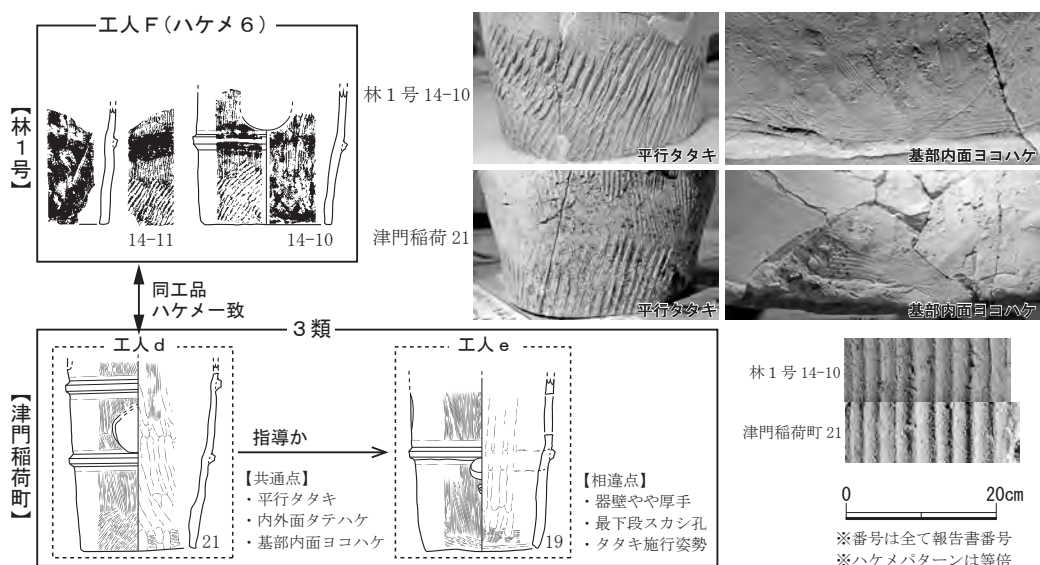


図5 林1号墳と津門稲荷町遺跡の同工品

記の通り製作技法を違えるだけでなく、ハケメパターンや底部高もやや異なるなど、一定の距離をもちながら製作にあたっていた可能性が考えられる。集団内で体系的に技術が共有されたというよりも、各グループがそれぞれ地域外の工人集団と個別に結びついて技術の獲得を図っていたことを想定しうるのである。

こうした可能性を考える際に注目できるのが、平行タタキによる底部調整を施す個体の存在である。このような埴輪は近畿地方では例が限られる中、すでに述べた通り、林1号墳には同様のものが存在する。両者が酷似することについては廣瀬寛による指摘があるものの（廣瀬2018）、上記の想定を例証するうえでも工人・工具レベルでの追究が不可欠である。そこで、新たに同工品分析およびハケメ同定を実施した。まず、林1号墳（10）と津門稲荷町遺跡（21）の平行タタキ個体はいずれも底部高12cm前後を測り、内外面ともほぼ垂直のタテハケを施す点で高い共通性を有する。また、スカシ孔は下方の突帯に寄る位置に穿たれ、底部調整を同一箇所にて2～3回にわたって入念に施すほか、基部成形時に内面ヨコハケを施す特徴的な手法も一致する。平行タタキが行われることもあわせて、これら諸属性が一致することは偶然とは考えがたく、互いに同工品である可能性が高い（図5）。

また、両者は林1号墳例が橙色で、やや大粒の砂粒を含むのに対し、津門稲荷町遺跡例は白色系で精良な胎土を呈しており、それぞれの地域で製作されたものと想定しうる。上記の事例と同じく、地域間での工人の移動によるものと判断されるのである。さらに、ハケメ同定の結果、両者ではハケメパターンが一致することが判明した。すなわち、林1号墳と津門稲荷町遺跡の平行タタキ個体は同工品かつ、おそらく同工具品とみられるのである。約35km離れてい

る両地域の間では、工具を携える形で工人の往来があったことをほぼ確実視できるといえよう。

また、津門稻荷町遺跡では、移動工人の製作個体である 21 に対して、19 などやや変容を含みつつも同様の製作技法を呈する個体が見受けられる点も重要で、移動工人がグループ内で技術波及の中心的役割を担っていた可能性が高い。ただ、当工人の有する製作技法は津門稻荷町遺跡出土埴輪の全体には及ばず、あくまでもグループ内にとどまる。地域外部との結びつきをもつ工人の指導的役割は、集団全体に及ぶというよりも、その下位区分にあたる製作グループ内で発揮されていたとみなすのが適切であろう。

他方、林 1 号墳と津門稻荷町遺跡の間において、ほかに同工品やハケメパターンの一致する個体は現時点で存在しないが、各類型とも王権中枢古墳群の埴輪と遜色ない。上では、平行タタキを施す特徴的な個体を通じて移動工人を抽出したが、各グループともにそれぞれ王権中枢地域の工人集団と結びついていたと考えて大過ないだろう。地域外部との結びつきをもつ工人が各グループに配され、それぞれのグループではそうした工人を核とした生産が実施されていた、というのが実態ではなかろうか。

2. 近畿地方における埴輪工人の移動実態とその背景

（1）定の山古墳と林 1 号墳にみる工人の移動パターンと生産組織

上では、王権中枢古墳群と周辺地域の間でみられる地域を越えた同工品、ハケメパターンの一致する個体の存在を明らかにしてきた。これまで推定の域にあった工人の移動について、それを実証的に捉えられるようになったことで、工人移動のベクトルを議論するための移動元・先での生産組織への組み込まれ方や役割をようやく議論できるようになったと考える。

その中でまず上記 2 例について、地域間を往来した工人は王権中枢古墳群において、ごく一般的な工人として編成されていた可能性が高い。例えば、林 1 号墳と津門稻荷町遺跡の間を往来した工人は、林 1 号墳の埴輪生産の中で、普通円筒埴輪の製作工人として編成されていたとみられ、製作数や製作器種からみても決して突出した存在ではない。同様に、定の山古墳と石光山 48 号墳の埴輪製作を行った工人も、前者ではほかに同工品やハケメパターンの一致する個体が存在しないほか、特徴的な文様を付す個体も存在しないことから、製作数はごく限られていたとみられる。このように、陵南赤山古墳の事例とはやや異なり、上記 2 例において王権中枢古墳群と周辺地域の間を往来した工人は、前者でごく一般的な工人として編成されていたことが想定されるのである。

他方、そうした工人は周辺地域において、生産組織内の各グループに配され、そこで指導的役割を担っていたものと思われる。津門稻荷町遺跡では、林 1 号墳の埴輪生産に携わった工人から派生する形で、平行タタキによる底部調整が施される個体が製作されるといったように、

王権中枢古墳群での製作経験を有する工人が製作グループ内で中心的に活動した形跡が見て取れる。周辺地域の埴輪生産に際しては、王権中枢古墳群での製作経験を有する工人が各グループに配され、それを核として生産が実施されていたと復元して大過なからう。

なお、津門稲荷町遺跡において王権中枢部の埴輪で認められる技法上のバリエーションが散見する点を考慮すれば、周辺地域の中小型古墳であっても王権中枢部との間を往来する工人は複数人に及んでいたものと考えられる。津門稲荷町遺跡の場合、こうした工人は集団内に存在する生産グループのそれぞれに配され、そこで指導的立場を担ったのではなかろうか⁽²⁾。

さて、ここまで移動工人の移動元・先での生産組織への組み込まれ方について概括したが、上記2例の場合、移動工人が王権中枢古墳群において、ごく一般的な円筒埴輪工人として編成されている点は留意される。資料的制約があることは否めないが、陵南赤山古墳などの事例と対照的にも映るこうしたあり方は、王権中枢古墳群から周辺地域への統括者・技術者の派遣というイメージとは必ずしも合致しない。また、王権中枢古墳群から周辺地域への工人の派遣を想定する場合、派遣先での従事ののち帰還することが含意されるが、そうした形跡が見受けられない点も重要であろう。資料の蓄積をまつ必要はあるが、林1号墳の平行タタキのような特徴的な要素をもつ個体が、再度王権中枢古墳群で製作された形跡は認められない⁽³⁾。こうした点もまた、王権中枢古墳群からの工人の派遣というよりも、周辺地域からの出仕と帰郷を通じて合理的に説明しうる事象といえるのではなかろうか。

(2) 近畿地方における埴輪工人の移動とその背景

地域を越えて移動した埴輪工人の事例を3例提示したうえで、移動元・先での生産組織への組み込まれ方や役割を検討し、現時点の資料状況から推察される工人の移動パターンについても言及してきた。最後に、改めて工人の移動パターンについて、検討成果を踏まえて予察を述べたい。

本稿でも取り上げた陵南赤山古墳と段上2号墳について、工人の移動パターンをめぐってすでにいくつか異なる解釈が提示されているなど（内藤2018、廣瀬2019）、地域を越えた同工品の存在をもってもその移動パターンは決しがたいのが実情である。また、周辺地域では移動工人が経験を活かして中心的な役割を果たすことが見込まれる以上、周辺地域側からのアプローチは困難になると予想される。そういった意味では、移動工人の、特に王権中枢古墳群での生産組織への組み込まれ方や役割に注目することが移動パターンを推論するうえで有効であろう。

その中で、まず陵南赤山古墳と土師の里南埴輪窯、段上2号墳のケースは、左利きで櫛歯状ヘラ記号を特徴とする工人に着目すれば「指導型」のパターンを想定することが可能である。同時に、段上2号墳のような15mにも満たない小型古墳において、当該のパターンを想定し

うるケースが存在することも留意される⁽⁴⁾。「視葬者」の派遣記事からうかがえる、有力古墳に対する統括者・技術者の派遣だけでなく（廣瀬 2019）、小型古墳に対しても王権中枢部側からの積極的な関与がなされる場合もあったとみなしておく必要がある。

ただし、詳細は前稿に譲るが、陵南赤山古墳と段上 2 号墳の間を移動した 2 人の工人のうち、円形ヘラ記号を特徴とする工人は陵南赤山古墳での製作数や製作器種がごく限られており、一方で段上 2 号墳では多数の製作に携わっていることに鑑みると、当工人については「帰郷（指導）型」の移動パターンとして解釈できる可能性がある。両パターンは、しばしば二項対立的に理解されてきたものだが、実際には複合的に捉えられる場合があるといえる。

他方、本稿で新たに指摘した定の山古墳と石光山 48 号墳、林 1 号墳と津門稲荷町遺跡のケースに対しては資料的制約があるものの、「帰郷（指導）型」の移動パターンを想定することが可能である。陵南赤山古墳における円形ヘラ記号を特徴とする工人の事例もこれに加えられるかもしれない。

こうした移動パターンについて、王権中枢古墳群側では膨大な埴輪需要を満たすための人員の補充という側面がまず存在した可能性が高い。さらに、地域からの工人の移動は王権中枢部の政治的イベント・儀礼への参加や出仕を含意していたともみられる。大型古墳の造営、とりわけ王権中枢古墳群での古墳造営はそれ自体が政治的な性格を帯びていたとみられ、須恵器生産においても上番の仕組みに王権中枢部で実施された儀礼への間接的な参与が含意されていた可能性が指摘されている（溝口 2015）。

翻って、埴輪生産についても地域からの工人の移動は造営事業への参加を通じた王権中枢勢力の隔絶性の誇示という点でも少なくない役割を果たしたことであろう。このように、「帰郷（指導）型」の工人移動は、労働力の確保や政治的イベントへの参加を通じた隔絶性のアピールといった、王権中枢勢力の優位性に基づくものである蓋然性が高い。

一方、周辺地域側も埴輪の製作技法や様式にかなする情報を入手することで、最新の儀礼装置を具備した古墳を造営し、対内・対外的に自らの権威を示しえたであろう。また、そもそもこうした移動パターンが、少なくとも中期初頭から後期にいたるまで長期的かつ安定的に想定できる点に鑑みれば（廣瀬 2019・2021）、この方式の成立には周辺地域側の積極的な合意もあったように思われる。工人移動にかかる体制は、王権中枢勢力が優位の下で進められつつ、周辺地域側も新たな情報や対価の獲得を企図して相乗りする形で整えられていったと捉えられるのである。

おわりに

本稿ではいくつかの実例に基づいて移動パターンの復元を試みた。しばしば取り上げられる

「指導型」、「帰郷（指導）型」の双方は、時期や階層別に偏るわけではなく、個々の古墳に応じて、さらには複合的なパターンを見せる場合があるといったように、容易には傾向を捉えがたい。しかしながら、工人の移動を背景にした埴輪の直接波及が、古墳時代を通じて見出せる点は重要で、いずれの移動パターンにせよ、その方式の成立には王権中枢古墳群・周辺地域双方の合意があったものと思われる。上記事例における移動パターンの多彩さは、前者主導とみられつつも中心周辺関係をめぐる勢力間の双方向的な関係性を示すものとして理解できるのである。

謝 辞

本稿作成にあたり、下記の方々・機関にお世話になりました。末筆ながら記して御礼申し上げます。泉真奈、竹原伸次、橘泉、續伸一郎、肥田翔子、平井洸史、廣瀬覚、山田暁、山中信人、大阪府教育委員会、堺市博物館、堺市、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、西宮市教育委員会、東大阪市人権文化部、藤井寺市教育委員会（氏名・機関順、各五十音順・敬称略）

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号：23K12310）の成果の一部を含む。

註

- (1) 同様の個体は岡山県総社市の中山6号墳にも存在するが、同工品は存在しない。
- (2) 生産の小規模さゆえに移動工人相互が近い距離で編成されたとみられる事例も存在する。
- (3) 周辺地域においても同様の特徴をもつ埴輪が以後、製作された形跡はないが、単発的な生産を基本とする周辺地域では、当工人が再び動員されなかったことも十分に想定できる。
- (4) 段上2号墳の周辺において盟主墳が存在した可能性も否定しえないが、段上古墳群全体の埴輪をみる限り、その可能性は低いと判断している。また、存在したとしても規模は小規模であろう。

引用・参考文献

- 宇野隆志 2018「埴輪の生産と流通」『畿内乙訓古墳群を読み解く』季刊考古学・別冊26 雄山閣、東京：pp. 96-105
- 加藤一郎 2013「古墳時代中期の埴輪生産に関する予察」『技術と交流の考古学』同成社、東京：pp. 558-569
- 鐘方正樹・中島和彦 1992「菅原東埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財センター紀要1991』奈良市教育委員会：奈良
- 木村 理 2022「古墳時代中期の円筒埴輪」『埴輪の分類と編年』埴輪検討会、奈良：pp. 25-49
- 木村 理・廣瀬 覚 2024「王権中枢地域における埴輪工人の移動と生産組織」『埴輪論叢』第13号 埴輪検討会、奈良：pp. 43-56
- 合田茂伸 2002『津門稻荷町遺跡発掘調査報告書』西宮市教育委員会、兵庫
- 柴田拓也（編）2019『百舌鳥古墳群の調査13』堺市教育委員会、大阪

- 白石太一郎ほか（編） 1976『葛城・石光山古墳群』奈良県教育委員会、奈良
- 内藤元太 2018「埴輪生産からみた初期群集墳と百舌鳥古墳群一段上古墳群出土埴輪の研究―」『待兼山考古学論集』Ⅲ 大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 451-462
- 花熊祐基 2021「埴輪生産からみた近江・息長古墳群―狐塚5号墳を中心に―」『埴輪研究会誌』第25号 埴輪研究会、東京：pp. 33-48
- 菱田哲郎 1992「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会、岡山：pp. 20-32
- 廣瀬 覚 2006「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」『史跡 五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会、兵庫：pp. 239-256
- 廣瀬 覚 2017「明石川流域における埴輪の展開とその背景」『播磨の埴輪』第17回播磨考古学研究集会実行委員会、兵庫：pp. 65-80
- 廣瀬 覚 2018「津門稻荷町遺跡と西摂地域の埴輪」『新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡』大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会合同シンポジウム 大手前大学史学研究所、兵庫：pp. 59-68
- 廣瀬 覚 2019「埴輪の生産・流通からみた古墳時代の権力生成」『考古学研究』第66巻第3号 考古学研究会、岡山：pp. 36-51
- 廣瀬 覚 2021「昼飯大塚古墳の埴輪生産体制再考」『昼飯の丘に集う―中井正幸さん還暦記念論集―』中井正幸さんの還暦をお祝いする会、京都：pp. 153-162
- 藤井幸司 2003「円筒埴輪製作技術の復元的研究」『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会、兵庫：pp. 31-62
- 藤永 昭ほか（編） 1981『林遺跡発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会、大阪
- 別所秀高（編） 2002『段上遺跡第3・4次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会、大阪
- 三木 弘ほか 2015「和泉地域における古墳時代前期の埴輪生産」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』18 大阪府立近つ飛鳥博物館、大阪：pp. 13-32
- 溝口優樹 2015『日本古代の地域と社会統合』吉川弘文館、東京
- 和田一之輔 2022「古墳からみた布留遺跡の集団間関係―須川1号墳出土埴輪の紹介―」『ここまで判った布留遺跡 発表資料集』天理市観光協会、奈良：pp. 47-58

挿図出典

- 図1：堺市『百舌鳥古墳群の調査1』、別所編2002より筆者作成
- 図2：白石ほか編1976、柴田編2019より筆者作成
- 図3：藤永ほか編1981
- 図4：合田2002
- 図5：藤永ほか編1981、合田2002より筆者作成